—古代から中世へ—

躍動の時代

—古市遺跡発掘調査概報—

平成４年３月

浜田市教育委員会

はじめに

古代から中世への転換は、単に平安時代から鎌倉時代、あるいは貴族から武士の政治に転換したというだけでなく、文化と社会の幅広い転換のあったことが知られています。また、石見においても石見国府が所在した下府平野から益田市の三宅御土居跡に中心が移っていくことになります。この大きな転換の時期に浜田がどのような様子であったのかを知る資料はほとんどありませんでした。しかし、平成３年に浜田市教育委員会が個人の宅地建設に先立って、下府平野の水田下に広がる古市遺跡の調査を実施したところ、この時期の貴重な資料を得ることができました。

調査は古市遺跡の遺存状況及び内容を確認することを目的にし、平成３年９月１７日～１０月２２日にかけて発掘調査を行いました。調査地は安国寺前面の水田で、浜田市上府町５９番地１にあたります。調査区は２５０㎡とし、水田面より約１ｍ下で遺構を確認しました。この調査にあたっては、村上　勇氏（広島県立美術館主任学芸員）、桑原韶一氏（島根県文化財保護指導員）、島根県教育委員会文化課にご指導をいただいたほか、松下正司氏（比治山女子短期大学）、広江耕史氏（島根県教育委員会文化課）にはご助言をいただきました。

以下、古市遺跡の調査概要について報告します。

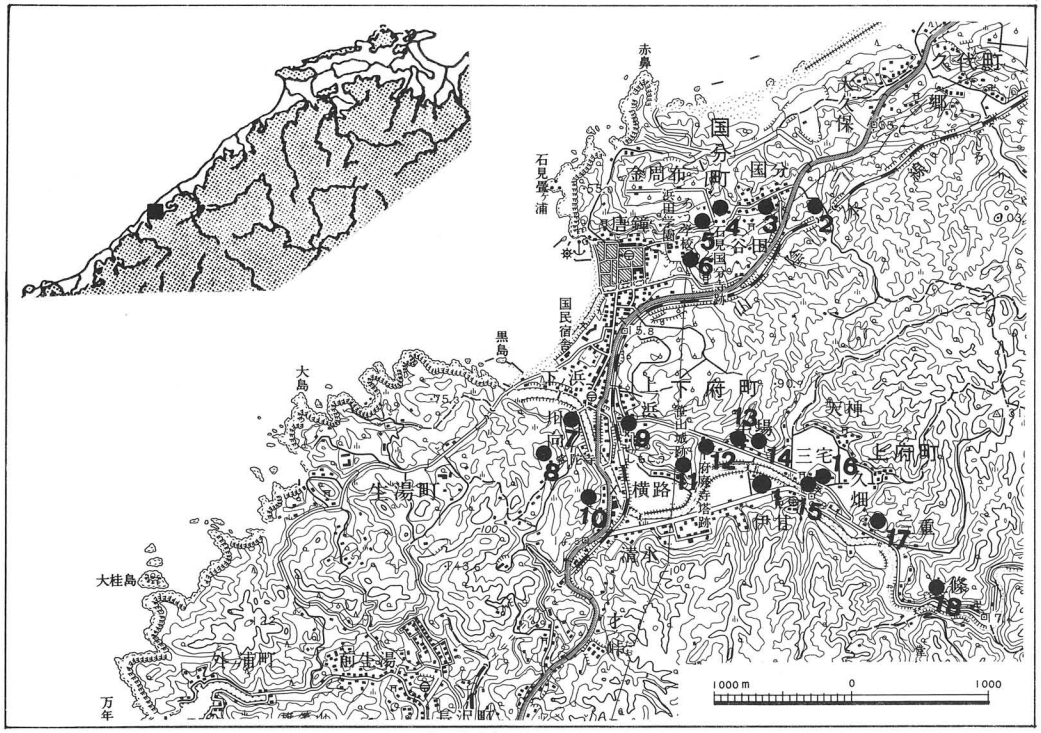


図１　古市遺跡周辺図

1．古市遺跡
2．奈古田窯跡
3．石見国分尼寺跡
4．石見国分寺跡
5．石見国分寺瓦窯跡
6．浜田ろう学校敷地古墳
7．川向遺跡
8．多陀寺遺跡
9．伊甘神社脇遺跡
10．中ノ古墳
11．笹山城跡
12．下府廃寺跡
13．半場口古墳群
14．片山古墳
15．宮宅山遺跡
16．上府遺跡
17．新延遺跡
18．上条遺跡

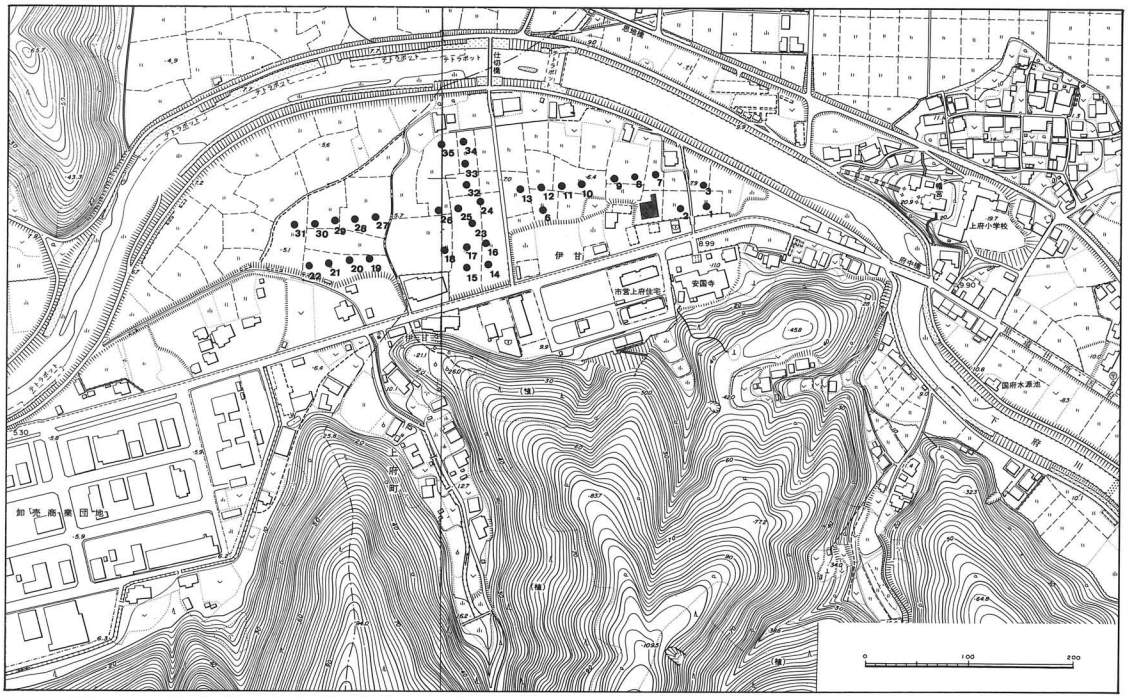


図２　古市遺跡調査位置図（黒丸が試掘調査、アミ部分が調査地）

遺跡の位置と環境

古市遺跡は石見国と呼ばれた島根県西部のほぼ中央にあたる浜田市上府町伊甘に所在し、下府川によって形成された幅約０．５㎞、河口から約３．３㎞の蛇行した下府平野の南側一角を占める遺跡です。標高は５ｍ前後で、下府川の氾濫を受けない自然堤防上に立地し、範囲は約６haの広がりをもっていると思われます。

下府平野で生活していた人々は多くの遺跡を残しています。先土器・縄文時代については明らかではありませんが、弥生時代には川向遺跡、伊甘神社脇遺跡、下府廃寺跡、古市遺跡、上府遺跡で生活が営まれ、上条遺跡からは地域社会が形成されていたことを示す銅鐸が見つかっています。古墳時代になると弥生時代に形成された遺跡で引き続き生活が営まれるとともに、浜田ろう学校敷地古墳、中ノ古墳、半場口古墳群、片山古墳が築造されます。このうち中ノ古墳、半場口２号墳、片山古墳には埋葬施設として横穴式石室が築かれています。奈良時代に入ると下府平野では大きな変化がおこります。当時は律令という法律にもとづいて政治が行われ、全国の国には役所（国府）が置かれますが、石見国ではこの下府平野に石見国府が置かれ、また、下府廃寺跡・石見国分寺跡・石見国分尼寺跡の寺院も造営されて、平安時代まで政治、文化の中心地として発展していました。平安時代末から鎌倉時代になると中心地は益田市に移りますが、下府平野でも伊甘神社脇遺跡、下府廃寺跡、古市遺跡、上府遺跡で生活が営まれていました。

す　ま　い

見つかった遺構は柱穴６４、土拡２でした。柱穴は調査区南東側に集中的に広がり、他ではほとんど確認できませんでした。なお、調査区の南東側から北西側へ向けて地山が傾斜していました。

今回多数検出した柱穴から掘建柱建物１棟を復元することができましたが、建物全体を確認することはできませんでした。棟方向は東から南へ１５度振ったものと考えられ、平面構成は４間×２(以上)間で、身舎は３間×２(以上)間、南側に庇あるいは縁を付属させています。この建物を仁摩町白石遺跡を参考にして復元すれば、身舎が３間×５間程度になるかもしれません。第３図は福井県一乗朝倉氏遺跡に復元された屋敷です。身舎は４間×６間ですが、当時の建物のあり方を知ることができます。

柱穴は円形の単純なもので、直径４０㎝～６０㎝、深さ２５㎝～３５㎝です。

この他に廃棄された土器が出土する土拡１不明土拡１を確認しています。

写真１　遺構発見状況

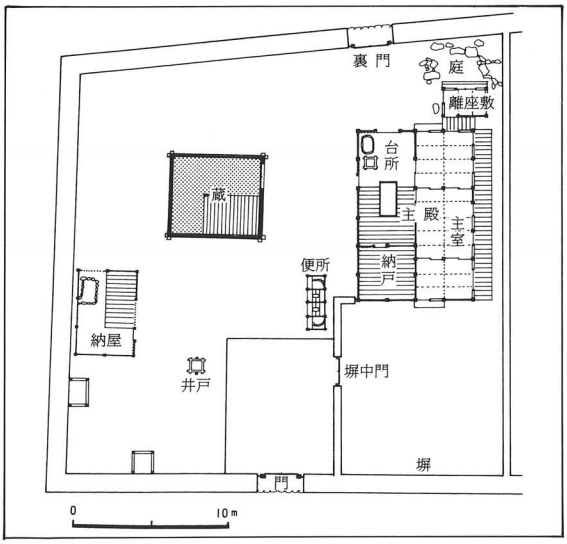


図３　一乗朝倉氏遺跡復元屋敷図

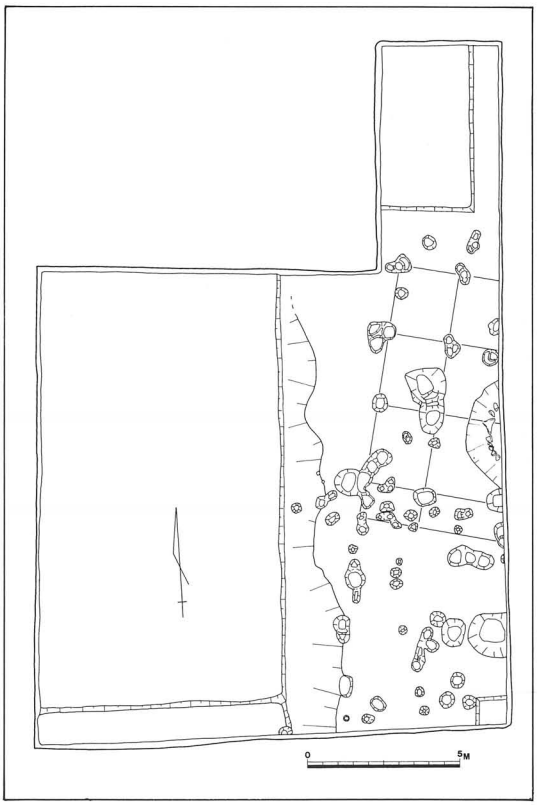


図４　遺構状況図

う　つ　わ

調査で発見した遺物は青磁、白磁、褐釉陶器、緑釉陶器、須恵器、土師質土器の他、瓦、鉄器があります。これらが使用されていた時期は１２世紀から１３世紀前半頃に使用されていたものと考えられます。ただし、緑釉陶器、須恵器・瓦の一部にはこの時期より古いものが含まれています。

古市遺跡のうつわ類の組成を破片数で見た場合、土師質土器が全体の９４．２％、須恵器が２．７％、青磁・白磁が３．１％で、土師質土器が主体となっていることが分ります。しかし、土師質土器は坏が大半を占め、甕や鉢等の調理具が見られませんし、台付皿の底部に穴を開けたものも見られます。これが何を意味するのかは、今後の検討課題です。

写真２ 発見された「うつわ」

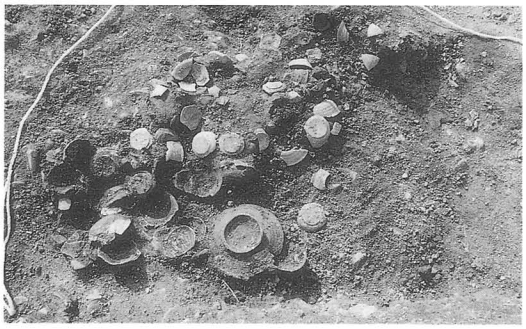
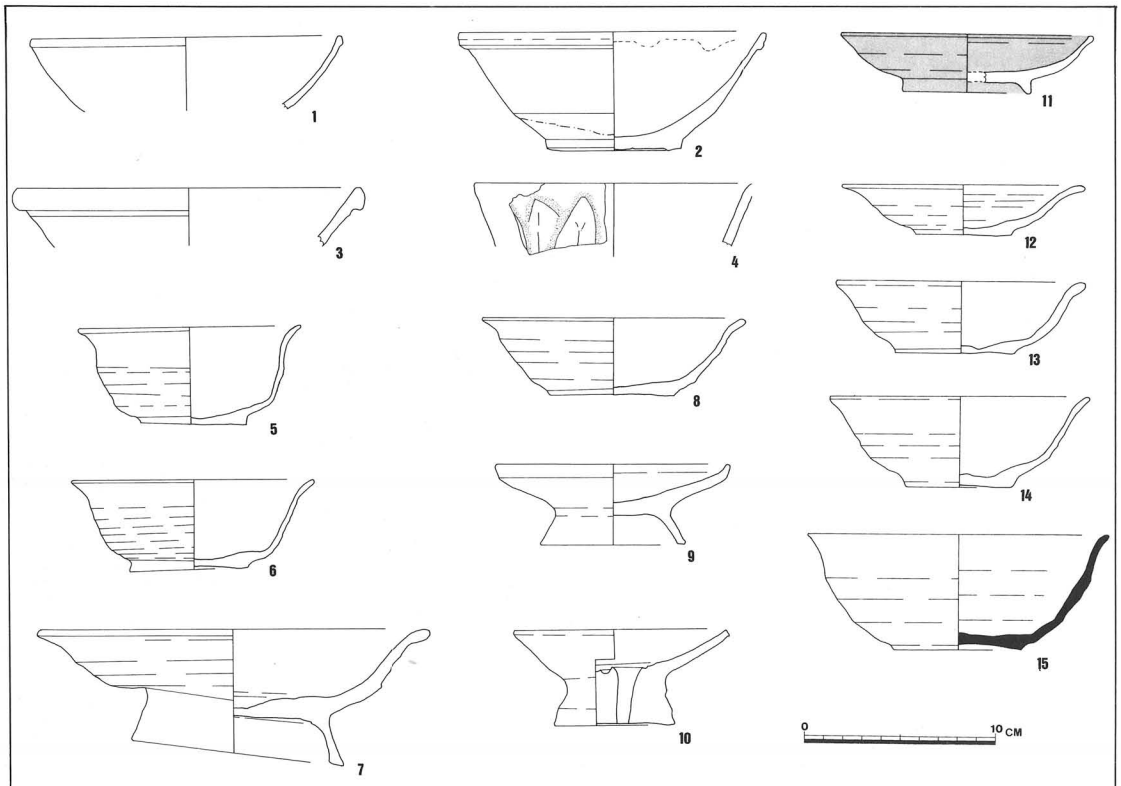


写真３ 遺物発見状況（土坑０１）



１～３は白磁、４は青磁、５～10・12～14は土師質土器、11は緑釉陶器、15は須恵器です。このうち１・２は試掘で発見、５～８が土坑01、12～15がPit16から見つかりました。

図５ 古市遺跡発見のうつわ

中世の伊甘郷

古市遺跡のある地区は、律令制時代は石見国那賀郡伊甘郷とよばれ、山陰道の終着駅伊甘駅のあったと推定される地区で、今も伊甘の地名が残る。郷内にあった国庁、国分二寺等を中心に道が各地に通じ[1]、物資の交易もなされる等、石見の中枢の地であった。

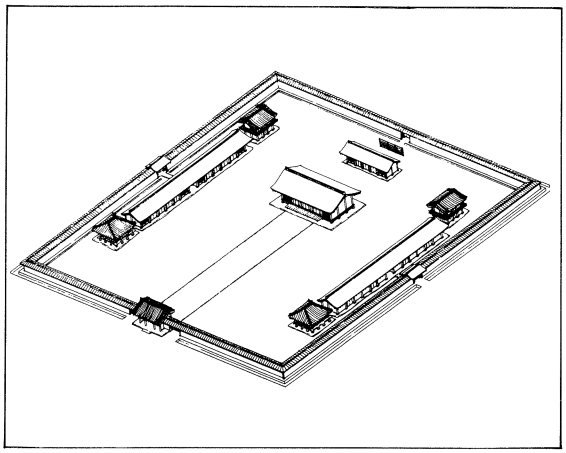


図６　伯耆国衙の建物復元図

伊甘郷と益田氏

貞応２年（１２２３）の『石見国惣田数注文』[2]によると、鎌倉初期の伊甘郷には５８町６反３００歩の田地があり、その全てが公領で、郷本来の微税対象であった即郷と国衙の在庁官人が領主であった在庁別名が集中していた。その有力在庁官人といわれるものに御神本氏や今も地名が残る千代松（千代末）氏がいた。従来の御神本氏発祥説については、益田市の三宅御土居調査結果をうけて新見解があるが、今後の究明をまちたい。しかし、そのいずれにせよ伊甘郷は御神本氏（以下益田氏と表記）にとっては深いつながりをもつ地であった。即ち文永１０年（１２７３）に、阿忍は亡夫益田兼長の遺領であった伊甘郷地頭職の配分をうけ、正和２年（１３１３）には福園寺に田畑１１町を寄進し、これを禅寺に改宗し公武の祈祷、先祖の菩提、亡夫兼長及び阿忍の後生を願っている[3]。正和５年（１３１６）の『阿忍置文』[4]に「ふくおん寺たいりん寺阿忍かことく一大事とすへし、ふさたあらんもの阿忍かあともつへからす」とあり、伊甘郷は阿忍の代までは益田惣領家に伝領されていたものと推測される。この福園寺は貞和４年（１３４８）に、足利尊氏から石見国安国寺にあげられている[5]が、これも国府所在地であったことのほか、北朝方として尽力していた益田氏との関係も無視することはできないと思う。

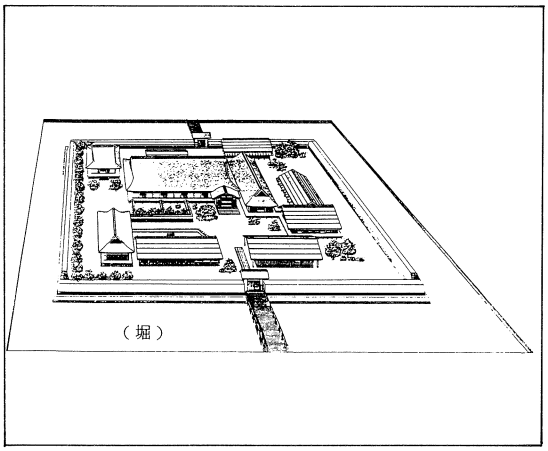


図７ 三宅御土居遺跡(調査により方形でなく長靴形であることが明らかとなっている)

永徳３年（１３８３）の『益田祥兼置文』[6]によると、伊甘郷は祥兼（益田兼見）の次男孫次郎兼弘に、東山道郷等とともに譲られている。また安国寺は阿忍建立の寺、泰林寺は阿忍塔頭の所であり、両寺とも賞翫すること。臼口大明神（御神本大明神）は益田氏の名字の起源であり、往古より一族等が伊甘郷で頭役を勤仕し神事を行ってきた。今後とも退転することなくもっとも奔走すべき祭であると、一族の精神的結合の要として重要視している。『国苑掌鑑』[7]によれば、この頃安国福園寺に

は曹渓庵（宗慶庵）、曇華庵（土現庵）等の子院があったが、現在は地名として残っている。

伊甘郷と三隅氏

このように伊甘郷は代々益田惣領家が伝領していたが、文明元年（１４６９）の『三隅中務大輔豊信知行目録[8]』によると、三隅氏の所領１１ヶ所の中に府中国衙がある。即ち伊甘郷である。南北朝以来三隅氏と益田氏は常に対立、抗争をつづけているが、その抗争の中で伊甘郷の領有権が移動していたのであろう。もっともこの１１ヶ所の地は同２年室町将軍家御教書によって、益田貞兼に安堵されている。もちろんただ一通の御教書でこれが実現するものではなっかたはずである。だから益田氏は文明１３年（１４８１）には、三隅貞信に対して「将軍家の御判物を所持しているので、自分の所有地であることは明らかであるが競望しない。殊に伊甘郷については、どのような証拠があろうとも、それはすべて反古とする[9]」ことを誓わせてその地をとりあげている。

伊甘郷と吉川氏

１６世紀に入り、天文３年（１５３４）福屋正兼が伊甘郷内の恩地その他の地を安国寺に寄進[10]し、永禄５年（１５６２）には周布元兼が府中八幡宮に、府中村内の田地２町４反その他の社領を寄進[11]する等、この頃には益田氏の伊甘郷領有権は有名無実化し、各国人たちに蚕食されていたのであろう。

そして天正１０年（１５８２）には、吉川元春は安国寺住職執務状を発し、同２０年には吉川元春家人連名の『安国寺領打渡坪付[12]』がだされていて、同１８年以後の『益田氏検地帳』のなかから、伊甘郷の地名が消えている。時代未詳ではあるが『吉川広家領地付立[13]』に「１５０貫、伊甘江（郷カ）」とある。戦国末期の毛利氏の石見進出と益田氏の消長等と考えあわせると、この頃には伊甘郷は益田氏の手をはなれ、吉川氏の領有するところとなっていたと考えられる。そして慶長５年（１６００）の関ヶ原の戦いを契機として、伊甘郷をはじめ石見国は徳川氏の直轄領となり、元和５年（１６１９）には古田氏の浜田藩成立となり、近世幕藩体制下の一村落としての歩みが始まるのである。

注

(1)『石見国府跡推定地調査報告Ⅲ』昭和５５年

(2)益田家文書７４－１及び井上寛司「貞応２年石見国惣田数注文の基礎的検討」『山陰史談』１８号

(3)(5)(7)(10)(12)『国苑掌鑑』安永４年に２１世澧州源麗和尚が著わした安国寺誌

(4)益田家文書５３－２

(6)益田家文書７３－１

(8)益田家文書８３－１

(9)益田家文書５７－１７

(11)上府町　旧社家尾崎正夫氏所蔵文書

(13)吉川家文書６９４　大日本古文書　家わけ９

ま　と　め

古市遺跡はすでに試掘調査により約６haに及ぶ範囲の遺跡であることが推定されています。今回はその一部しか調査していませんが、古代から中世への転換期の石見を考える上で大変重要な遺跡であることが明らかとなりました。以下、簡単にまとめておきたいと思います。

遺構については、調査区の西側２／３と北側１／３から遺構、遺物が認められなくなることから、古市遺跡の北側縁は面的に凹凸のあるものと考えられます。今回の調査地点は北側に凸状に突出した微高地の西側隅に辛うじて当ったものと思われ、調査区の東側及び南側にその中心が存在するものと想定されます。建物は庇あるいは縁を付けた掘建柱の建物が建てられていました。遺物は１２世紀から１３世紀前半の土師質土器、須恵器、白磁、青磁、褐釉陶器が見つかっています。このうち白磁、青磁といった輸入陶磁器は浜田市域では今のところ上府遺跡、下府廃寺跡、伊甘神社脇遺跡の３遺跡でしか確認されていませんし、褐釉陶器に至っては石見部で３遺跡しか確認されていません。また、量的には多いものではありませんが、瓦も見つかっていますので調査地の周辺に瓦を使用した建物が想定され、古市遺跡が単なる集落遺跡であるとは考えられません。さらに、１２世紀以前の遺物はあまり見ることはできませんでしたが、凹面に布目、凸面に縄叩きを施す瓦や緑釉陶器、須恵器があり、なかでも緑釉陶器は石見部で初めて確認することができました。

したがって、古市遺跡の性格を考えた場合、国府とは言えないまでも官的な施設や有力豪族の館、福園寺等の寺院関連、そして字名が示すように市を想定することができ、古代から中世への転換期の石見の状況や国府への手がかりとして、無視できない遺跡であると言えます。いずれにしても、現段階では調査範囲が狭い上、調査の整理が不十分であり、また、本遺跡を考える場合、地質・地理学など総合的な検討を避けることはできません。今後、十分な調査が必要であると言えます。

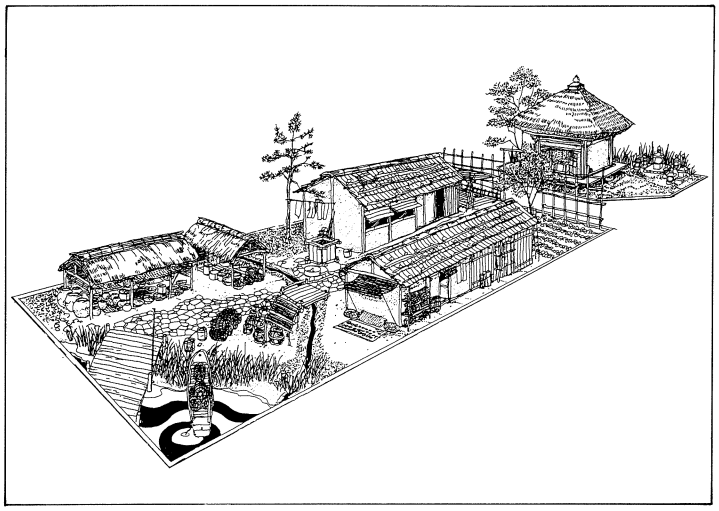


図８　中世の村(草戸千軒遺跡)

お　わ　り　に

下府平野は古代石見国の中心地と言われながら、多くの謎が残されています。そのなかで、今回の調査はその一端を明らかにすることができました。

調査にあたり地権者の小林修司氏に大変なご協力をいただきました。記して感謝いたします。

小冊子の編集・執筆は原裕司、「中世の伊甘郷」は桑原韶一があたりました。